

Title	在りし日の岡道男君を偲びつつ
Author(s)	松平, 千秋
Citation	西洋古典論集 (2001), 別冊: 48-48
Issue Date	2001-01-31
URL	http://hdl.handle.net/2433/68729
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

在りし日の岡道男君を偲びつつ

松平千秋

岡道男君の学歴表を眺めている時、ふと気がついたことがあった。それは同君が西洋古典を専攻に選ぶ経緯が、どこことなく私の場合に似ているような気がしたことである。

岡君は昭和6年に大阪の高校を卒業後、京大文学部（ドイツ語学ドイツ文学専攻）に入学、昭和30年3月に卒業、卒業論文は「シラーとウィルギリウス—— 一試論 ——（独文）」であった。

私の場合、ドイツ語を選んだのは、懇意にしていたある先輩が、学問をしたければ、ドイツ語をやらねばならぬと言った言葉に動かされたままで、いささか主体性に欠けた決断ではあったが、もの珍しい気持も手伝って、結局は自分も文科乙類を選択した次第であった。当時は英独仏三大言語の内、ドイツ語が最も難しいというのが通念であったから、野心的な学生が、ドイツ語をマスターするのは名誉なことと思われていたのである。

ついで昭和30年4月に岡君は修士コースに進むが、この時の専攻科目は言語学となっている。察するに、岡君は当時既に古典語（ギリシア語、ラテン語）に興味が移っていたのであらうと思われる。昭和32年修士課程を修了するが、この時提出した二論文は、いずれもホメーロスに関するもので、後年の博士論文につながる労作であった。